

2026年度第1回森と水の源流館授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 特任教授 中澤 静男

1. 開催日時 2026年7月04日(土) 10時～12時20分
2. 開催方法 ZOOMを用いたオンライン開催
3. 参加者 宇多(紀の川流域カンパニー)
中村(朱雀小)、橋本(平尾小)、加藤(川上村役場)、
源流館: 尾上・高田・成瀬・木村・植西・古山
奈良教育大学学生: 榊原・東・勝田 教員: 河野・中澤 合計15名

4. 内容

(1) SDGsからネイチャーポジティブへ(中澤)

①SDGsに対する企業の対応

大企業においてはESG投資を意識するようになっている。

自社だけでなく、原材料の購入先、廃棄物の移出先も含めたSDGsサプライチェーンが評価
関連企業(下請け)においても、親企業からの仕事の受注のため、SDGsへの貢献を意識
エシカル消費など、消費者から選ばれる企業になることを目標に

2024年1月の朝日新聞が実施した第10回SDGs認知度調査

SDGsに沿った商品・サービスの価格について、「価格が高くても購入/利用したい」の項目

2.9%から3.2%に、「価格がやや高い程度なら」が21%から21.2%に増加、「価格が高くても」と
する10代が2.6%から4.9%に、20代では3.4%から5.6%と大きく増えている

②プラネタリー・バウンダリー(地球の限界)

「生物圏の健全性」が危機的状況に。

「生物多様性は損失し続けています。例えば、地球上の種の絶滅速度は、過去1,000万年平均の
少なくとも数十倍、あるいは数百倍の速度で進んでいます(IPBES地球規模評価報告書(2019))。

これは恐竜が絶滅したときよりもはるかに速いスピードです。」(出典:環境省)

③ネイチャーポジティブ

「昆明・モントリオール生物多様性枠組」: 自然を回復軌道に乗せるために、生物多様性の損失を
止め反転させるための緊急の行動をとること(2030ミッション)

④SDGsからネイチャーポジティブへ

SDGsと同様、ネイチャーポジティブへの貢献が投資に影響すると同時に、消費者の選択にも
反映される

企業努力を空回りさせないためには、教育により多くの市民の理解を深めることが大切

(2) 紀の川流域カンパニーの取り組み(宇多さん)

2050年の日本社会は持続可能な社会だろうか

- ・都市集中型社会の場合 → 人口減少に歯止めがかからず持続不可能な社会に
- ・地方への人口分散型社会の場合 → 人口が増加し、人々のウェルビーイングが向上
恒例になっている「企業の成長目標の上昇」はありえるか?

人口減少社会になっていくため、拡大ではなく定常化を考える必要がある

○紀の川流域カンパニー 「地域を結んで未来をひらく」(地域課題を乗り越える)ことを共通目標に
～消費者マインドを醸成する農業エデュテインメント事業～

事業内容 ①体験農園事業、②宿泊施設運営事業、③教育・研修事業

紀の川市・地域おこし協力隊スタッフ・紀の川農協 地域のビジネスアセットを結集

アセット：個人や企業がもつ資産（現金・不動産・特許・ブランド力）

ゼブラ企業 地域課題の解決×利益追求：社会課題の解決を事業の中心に据えた経営を行う企業

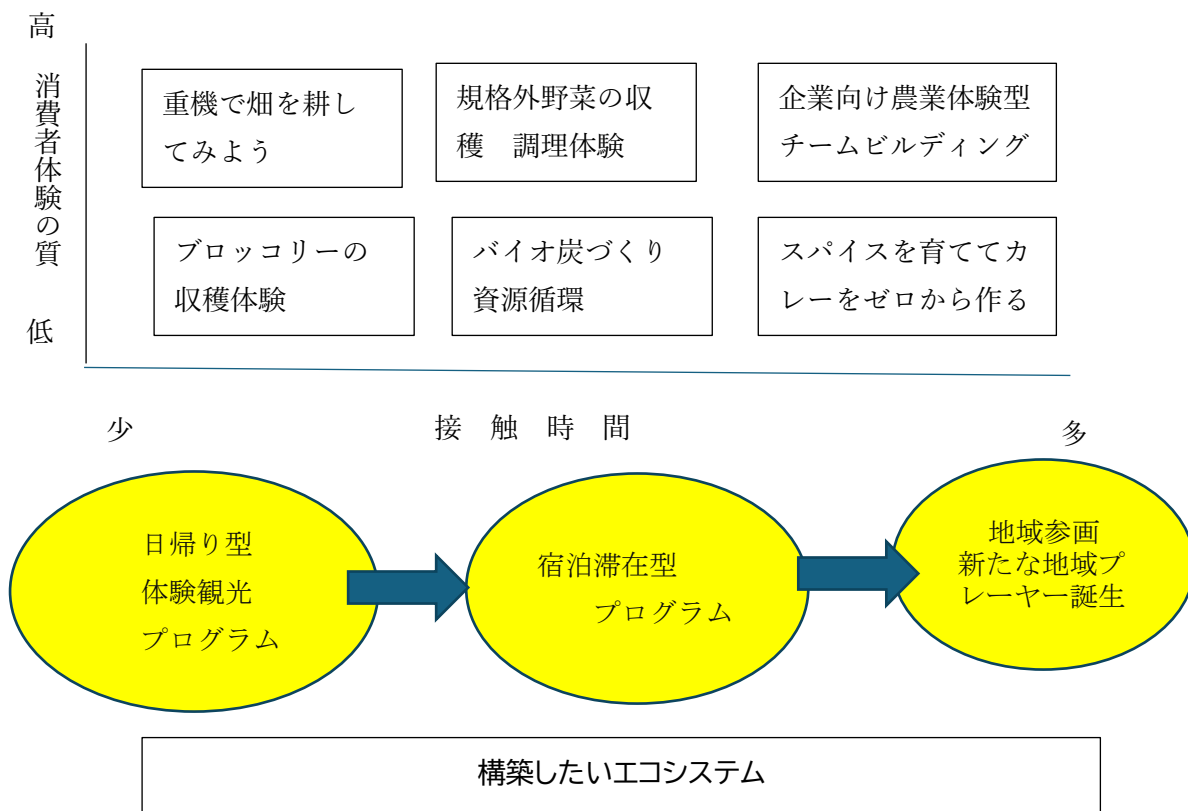
社会課題：遊休・耕作放棄地、空き家、人財・担い手不足（人口減少・農家の担い手不足）

それぞれの企業のアセットをつなげて、「新しい社会経済生」

- ・耕作放棄地を活用し学び×エンタメの Edutainment コンテンツを開発
 - ・空き家を活用した体験農園・観光農園利用者の滞留・滞在施設
 - ・新たな担い手育成事業：体験農園事業ユーザー→移住検討者・就農希望者の拡大
- トウモロコシ・柿・イチゴ収穫体験

「田んぼサッカー」に300人集結（FC KISHU）

高校生の探究プログラム 食品ロスのリアルと原因を探れ



（3）質疑応答

- ・児童生徒とネイチャーポジティブに取り組む企業をつなぎたいと考えている
小学校との連携はまだない。有機農業と食育をつなぎたい。以前は生き物観察で連携したすべての生き物は利他でつながっていることが基本
ゲームはリセットできるが、生き物はリセットできない
野菜にも命がある。食べ物も自分と同じ命なんだ → 実感が大切だと感じている
利他が教育の核になるのではないのか → 実感が大事だ
- ・エデュテインメントに感心した。じっくり時間を長くにとって得るものがあると思っている。
学ぶことはしんどいものではない。楽しくやりながら学ぶことが大切。一緒に食べることで

つながりができる。記憶に残る、それが大切だと思う。

→ 形骸化してしまうと「体験あって学びなし」になりかねない。教員の理解・役割が重要

- ・ 田んぼのサッカーは人間代かきみたいなもの。

試合参加者は 80 人、見学者を含めると 300 人。小学生も 4 チーム。

福祉関係の方々。認知症の方。

→ 源流館でも「林業体験」を基本に考えてほしい。

- ・ ゆるやかにつながった「地域と人との関係性」について

高齢者：若い人への期待、元気が出て、やりたいことが出てくるように進めている。

大人が頑張っている姿を見せると、地域に残る子どもが増え、地域が元気になっていく。

次回は 8 月 1 日（土）10 時～12 時 30 分

谷林業谷株式会社：陽楽の森での取組発表